

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日印刷  
明治三十二年十月十日第三種郵便物認可  
平成二十一年十二月一日発行  
（第六十二号）

# ホトトギス

十二月号



## 俳句随想 〔三百三十〕

汀子

朝日新聞の夕刊の一面に「ニッポン人・脈・記『お殿様はいま』」という写真と記事が掲載された。犬山城主であった成瀬正俊についての記事であった。実は私は正俊さんと京極杞陽さんについて予め取材を受けて精一杯お二人の素晴らしさを話した積りであるが、九月二十八日の夕刊に成瀬正俊さんについての分が掲載された。杞陽さんの掲載はないかも知れない。お二人とも世が世ならば「正俊さん」「杞陽さん」などと気楽に呼ぶと打首になったかも知れない人達であるが、俳句を通して語る数々のエピソードはすべての肩書を外した一俳人としてのお人柄を語ることになったと思う。我が国には昔から「歌の前の平等」という素晴らしい伝統があるが、お二人の場合はそればかりではなかったように思われる。虚子を中心としたあの時代ならではの俳人達の心の交流であったように思う。言葉を変えれば戦後の貧しい時代に助け合って生きて行くために俳句は心のオアシスだったのである。虚子を取り巻く人々も多くは鬼籍に入られた。虚子没後五十年の年。ここで改めて進むべき俳句の道をしっかり見据えて行きたいと思う。

旬日記

汀子

平成二十年十二月一日 ロイヤル俳壇

冬帝の意に従へば快晴に  
鴨飛べばそれと分りぬ首をのべ  
冬ざれといふ人生の一頁  
滞在の一と日の雨に冬ざれる  
冬ざれの庭垣間見て旅帰り

十二月二日 有恒俳句会

一片の雲も置かざる寒さかな  
三次会目は年忘てふ一と日  
こぼしたるくさめは一つのみならず  
散黄葉散らざる紅葉一景に  
散ることを忘れしやうな冬紅葉

十二月二日 無名会

霜月にずれ込む仕事積まれけり  
短日や予定三つにふくらみぬ  
顔見世の終りし人出どつと増え  
大見得を切つて顔見世なりしかな  
霜月の予定加はり行きにけり  
冬紅葉夕日をとらへはじめけり  
短日の渋滞に巻き込まれけり

十二月二日 日本伝統俳句協会忘年会

予定追ひ師走の街を抜けて来し  
まなうらになほ冬紅葉燃えてをり  
短日といふ言ひ訳はなかりけり  
十二月五日 悼 長谷川登美様

孝養をつくされしこと年惜む  
輝ける御生涯の年惜む  
朝日新春詠

いくたびも覚めて初夢新しく  
虚子没後五十年初春となる  
初春の道志ありてこそ  
十二月六日 芦屋ホトトギス会

庭師逝き落葉の庭の残さるる  
掃かれたくなき落葉とて一斉に  
十二月七日 関西野分会

焼諸を食べる胃袋別にある  
快晴といへる寒さのあることを  
十二月七日 下萌句会

得度終へられし表情小六月  
星を見に出ては寒さに追はれたる  
うつかりと寒さ忘れて出掛け来し  
十二月八日 祝井天宗文化部四十周年

冬帝も加はる祝ぎとなりぬべし  
十二月九日 大阪倶楽部

夕時雨あるべし夜となる家路  
短日の暮れてはかどる仕事あり  
時雨るといふも不確かなる外  
枯尾花とて日に風に応へあり  
風去りてやがて静もる枯尾花  
また明日へ回す稿債日短  
十二月九日 綿葉倶楽部

菊枯れてゐても花色失せざりし  
枯菊となりてもその香強きこと  
まだ供華に勇りて枯菊とも言へず  
年末の心に添はぬ一日とも  
十二月十一日 清交社

短日の予定狂ふといふことも  
旅話聞くも短日なりしかな  
消息の絶えたる人や日短  
六甲の稜線模糊と冬ぬくし  
川尻の水鳥の又増えてぬし  
十二月十日 工業倶楽部

渡り来し鴨がこんな近くぬし  
師走とて省略出来ぬ旅路かな  
不意の客師走の予定崩れけり  
十二月十七日 夏潮句会

知られたる師走の居留守許されよ  
顔中のマスクが語りをりにけり  
散紅葉掃かれし後の散紅葉  
霜月の夜明の土星西空に  
冬薔薇の五十本とて今日のため  
美人かも知れぬマスクの大きさよ  
十二月十九日 時雨会

お弁当少し忘年会らしく  
障子今庭木の影を置きぞめし  
みみづくの森ここよりは立入らず  
朝の日を集めて光る霧水林  
クリスマス近し蠟燭点すべし  
霧水消え何もなかりし山容  
づく鳴いて一人の夜にある静寂  
十二月二十一日 野分会

焼諸屋流して遠き音ばかり  
餅焼いて旅の余白を埋めけり  
近づきて又遠ざかる焼諸屋  
今日まこと冬至なりしと思ふ旅  
早く目の覚めて二度寝の冬至かな

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十二年十二月三日 一水会

枯れ切つて呵呵大笑の芙蓉かな  
山積の稿に風邪引く暇もなく  
冬霞ビルの伸びゆく丸の内

十二月四日 蕉心会忘年会

短日やこの猫何が言ひたいねん  
船音の冷たく過ぎてゆきにけり  
寒釣の釣果丸太でありにけり  
枯蕨の川端 龍子めく曲り  
冬黄葉 江東区てふ彩りに  
鉄の橋は冷たく塗装され  
焼諸の声はアレグロノントロツポ

十二月六七日 岡山開む会

悴む手握手癒してくれにけり  
自由律苦勞して読む息白し  
きらと日矢ちらちらちらと六花  
散紅葉蹴飛ばす君の長き脚  
霜柱私行くまで踏まないで  
手毬唄飛び出しさうな良寛像

初氷割る麗人の細き指  
一枚の岩の上に座す寒さかな

十二月八日 朝日カルチャー若草句会

百五キロカロリー巻織汁啜る  
都鳥目が言問うてをりにけり  
都鳥水面弾いてをりにけり

十二月十一日 土筆会忘年会

冬ぬくし今年最後の旅控へ  
坂上る師走心を忘れつつ  
牛込に彼の足跡漱石忌  
紀の善の女将偲びもして師走

十二月十二日 六甲会

風邪の目で私を見つめるのは嫌  
人參の彩が躍つてをりし鍋  
どさと置く葉付土付人參を  
風邪引いたやうな迷犬ロンの鼻  
抜きたての人參といふ大地の香

十二月十三日 虚子記念文学館投句

冬木の芽記念樹といふ競ひかな

十二月十六日 草木瓜会忘年会

隙間 風地震の爪痕残る街  
隙間 風築百年といふ節目  
隙間 風六甲 嵐 招き入れ  
隙間 風父の声とも叫びとも  
こんな夜はのつべい汁を肴とす

十二月十八日 登高会忘年会

山眠る 百万弗の夜景抱き

泊雲も虚子も来よ爛熱うせよ  
山眠る徳川埋蔵金は何処  
わて泳げまへんねんてふ冬の鳥  
人拒む色に六甲山眠る  
熱燗やおつとつとつとおつとつと

十二月十九日 時雨会

火の山の伽とし今朝の霧氷林  
木兎の視線に射られぬる歩幅  
一粒の星より霧氷生れ初む  
木兎の耳が風呼び嵐呼ぶ

十二月二十日 若水会忘年会

冬帝の上り下りて入る京  
電飾の溢れ天皇誕生日  
冬帝の踵を返したる日和

十二月二十四日 目黒学園句会

東京タワー五十年目のクリスマス  
日に風に水に枯れゆく尾花かな  
べらんめえクリスマスなんて柄かな  
冬の星月を褥に相寄りぬ  
君に告白せし冬の星の下  
あるがまま枯れ尽したる尾花かな

十二月二十五日 田鶴出句

虚子記念文学館の去年今年  
初富士を車窓にホトトギス社へと  
フアックスてふ賀状稲畑汀子邸  
初電話神戸市東灘区より  
初句会芦屋駅前ラポルテに



## 雑詠句評（十一月号より）

保佳・葉・芳子

静龍・中正・むつみ

眞理子・美奇・憲明

千鶴子・とほ歩・廣太郎

来月に期すことのあり暑に耐へて たつの 浅井青陽子

月が變つて来月になればと期待することがある。とにかく現在の今日一日の炎暑に耐えて行くのだ、という覚悟をしめす一句のように思われる。青陽子さんは、この七月三十日を迎えると、満百歳とられる、俳人として事業家として立派に御長寿を保たれたことは誠に目出度いことである。謙虚なお人柄を表わす一句として現在の心境をたんと述べられた作品である。（保佳）

御投句は、平成二十一年七月八日、となつており、丁度暑さも

厳しい季節である。平成二十一年は、関東地方ではあまり暑い夏ではなかつたようだが、それでも夏は夏である。作者も、来月には何か大きな節目があるのだろう。現在の心境と、来月への期待が見事な対比を見せている。（廣太郎）

蟬よりも詩の貧しき老詩人 福山 竹下陶子

この句の「詩」は、花鳥諷詠詩を指すのであろう。従つて「詩の貧しき老詩人」とは、自省の念をこめた俳人の作者自身のことであろう。蟬の鳴き声がかもし出す美しい詩の世界のなかに立つて、懸命に詠み鳴く蟬の声に聞き惚れている作者の姿が浮かんでくると同時に、大自然のいのちに励まされている作者の感動がよく伝わってくる句である。（葉）

毎年季節になると、日本では蟬が鳴き、その声を日本人は愛でる。聞いた話では、欧米には一部を除いて蟬は生息しておらず、蟬を知らない欧米人がこの声を聞くと不思議がるそうだ。蟬の声を「詩」と聞き、自戒のように詠んではいるが、美の世界に浸っている作者なのである。（廣太郎）（以下略）

天地有情

江戸選

踊唄哀しきときの踊笠 神戸 後藤立夫  
 まなむすめとはすゑむすめ底紅星 同  
 ビル風に夏蝶放り上げられし 東京 稲畑廣太郎  
 夏蝶の三つ巴てふ荒さかな 同  
 父祖の地にいつか帰らん天の川 榎原 稲岡 長  
 私設天文台急げ星流る 同  
 天心のふと暗かりし原爆忌 福山 竹下陶子  
 色草を摘めば妣あり故郷あり 同  
 風呂沸いて夕食できてゐる帰省 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 夜の秋医師の言葉をかみしめて 同  
 ビルの空けふより銚の空となる 奈良 古賀しづれ  
 銚宿となる格子戸を磨き上げ 同  
 万緑を抜け万緑へ古都の道 京都 安原 葉  
 奈良ホテル庭の緑に染まり立つ 同  
 青田に來水の高さを見て去りし 熱海 嶋田 一步  
 富士暮れてゆく月見草咲きはじむ 同  
 日かげりてよりあぢさゐの色となる 箕面 井上浩一郎  
 あぢさゐや晴れてをりてもどこか雨意 同

曇天もよろしき朝の月見草 東京 河野美奇  
 岩かげの露みな涼し朝の風 同  
 もう後に退けざる汗でありにけり 神戸 山田弘子  
 汗拭いて呑み込む一語ありしこと 同  
 水輪みどりに天地のこゑすなり 熊本 岩岡中正  
 睡蓮に日輪ひとつづつ宿る 同  
 佐比売野の鵲啼く梅雨の霧深し 浜田 田中静龍  
 翡翠の影を置かざる早さかな 同  
 水旗さゆらぎもせぬ真昼かな 神戸 三村純也  
 バルコンの出来しからは銀河恋ふ 同  
 小城下に住みて幸ありほととぎす たつの 浅井青陽子  
 ほととぎすもう鳴く頃と水亭に 同  
 蛸壺の中に日盛ひそみぬし 神戸 後藤比奈夫  
 蛸壺に付きて涼しき小貝たち 同  
 己がじし奏でゐる木木青嵐 吹田 宮崎 正  
 夏炬ある部屋にいつしか集ひをり 同  
 沈みぬし舳先の宙に土用浪 高知 橋田憲明  
 日より紅届く間に間ある酔芙蓉 同

# 天地有情句評

## 汀子

天心のふと暗かりし原爆忌 福山 竹下陶子

忘れられない原爆の日。空を見ると思い出す感慨。

風呂沸いて夕食できてゐる帰省 龍ヶ崎 今橋真理子

帰省子を待つ親心。

ビルの空けふより銚子の空となる 奈良 古賀しぐれ

祇園祭一色となる京の空。

万緑を抜け万緑へ古都の道 京都 安原 葉

古都京都ならではの豊かな緑。

富士暮れてゆく月見草咲きはじむ 熱海 嶋田一步

富士山の裾野の月見草を描く。

まなむすめとはすゑむすめ底紅忌 神戸 後藤立夫

後藤夜半の忌日に思い起こす名句。

ビル風に夏蝶放り上げられし 東京 稲畑廣太郎

東京のビル風に逆らわぬ夏蝶の遅しき。

父祖の地にいつか帰らん天の川 樞原 稲岡 長

父の故里に寄せける郷愁。